＜前回＞フィオーレのヨアキム

・自然と歴史という対概念は、近代的な思惟の特徴（典型は、自然主義と歴史主義）。
・しかし、歴史をめぐる思惟は、中世においても欠けているわけではない。基本的には、歴史神学的思考として。歴史的思惟は聖書解釈と密接に関わっている。

＜ヨアキム・フィオーレ＞

フィオーレのヨアキム（Joachim of Fiore） 1130 頃-1202

イタリアの神学者、神秘思想家。南イタリアのカラブリア地方のフィオーレに修道院を開く。独特の三位一体論に基づいた歴史神学を展開し、フランシスコ会を始め、中世以降の千年王国論に大きな影響を与えた。

（1）キリスト教終末論、黙示的終末論

モルトマン『神の到来』（新教出版社）

・永遠の生（個人的終末論）：魂の不滅、肉体のよみがえり、永遠の生命、煉獄
・神の国（歴史的終末論）：千年王国論、歴史の終り、黙示文学的終末論、万物の復興、最後の審判
・新しい天・新しい地（宇宙的終末論）：創造の将来、世界の絶滅・世界の変容・世界の神化、終末論的エコロジー
・栄光（神的終末論）：神の自己栄光化、神の自己実現、永遠の喜びの祝祭

終末論はキリスト教に限定された考え方ではなく広く諸宗教にも見られるものであるが、キリスト教的終末論の特徴は、「究極的事柄についての教え」（＝終末論）を時間的な範疇を使ってイメージ化する点に認めることができる。

（2）古代キリスト教の終末論――アウグスティヌス

１．アウグスティヌスの歴史神学・終末論：『神の国』

時代区分：「アウグスティヌスは六つの時代を区別している。最初の時代はアダムからノアまで、第二はノアからアブラハムまで、第三はアブラハムからダビデまで、第四はダビデからバビロン捕囚まで、第五がバビロン捕囚からキリスト誕生まで。そして第六の時代は、時の終わりまで続くのである。」（ジャック・ル＝ゴフ『時代区分は本当に必要か？連続性と非連続性を再考する』藤原書店、20）

「ダニエルもアウグスティヌスも、時間を区切る際に自然のサイクルから想を得ている。・・・人生の六つの年代を指し示してもいる。すなわち幼年期、少年期、青春期、青年期、壮年期、老年期である。」（21）

２．黙示的終末論からの離脱（アウグスティヌスも始めから千年王国論に否定的だったわけではない）

４．教会に現前する「キリストの支配」、未来の事柄ではない。

キリストと聖徒たちによる「千年間の支配」はすでに教会の中に現前しているであり、「教会は現在においてもキリストの御国」（158）なのである。

５．モンタノス運動のように終末や霊的自由は、未来（さし迫ったとはいえ）の事柄ではなく、すでに現在の事柄である。

（3）フィオーレのヨアキム

６．ヨアキムの聖書解釈学

聖書テキストの多義性＝四重の意味：字義的意味、寓意的意味、道徳的意味、神秘的意義

「ヨアキムは象徴の理論家であるが、象徴的心性そのものの限界のうちにおける理論家にとどまる。「ヨハネの黙示録」を除いては、黙示的終末論の伝統には彼に比肩する者はない。修道院長は、すべての真理への鍵である聖書の文言のうちに展開された三位一体と歴史との結合の諸神秘を証明する手段として象徴を用いる。」（マッギン、152）

７．聖書解釈から歴史理論
　三位一体論：内在的　→　経綸的・歴史的
「神が歴史を支配する」「聖書がそれを語っている」
「三つの位格を有する神が歴史の主であるならば、聖書の本文にある歴史的叙述はこの真理の現れとして理解されねばならない。」（173）
８．ヨアキムの歴史解釈
・父の時代／子の時代／聖霊の時代
・三つの時代の相互内在　→　歴史の弁証法
・未来としての聖霊の時代
９．ヨアキムは切迫した終末（一二〇〇年という年の接近）を強烈に意識しつつ、来るべき歴史の新段階､新しい完全なる社会というユートピアの幻の中で生きたのであったが、それは、アウグスティヌスの場合とはまったく異なった終末論、まさに黙示的終末論というべきものの典型であると同時に、西欧における歴史の弁証法的ダイナミズムを鋭くとらえた歴史哲学の起点を成しているのである。
10．黙示的終末論の再興：千年王国論のインパクト

10．民衆・市民と新しい宗教性

＜これまでの講義から＞

１．中世社会の変動と新しい宗教性の展開：下部構造から上部構造？
・農業革命（11 世紀を中心に。二圃制から三圃制へ。犂や水車の改良）
　→　都市（自治都市へ）の発展、都市同盟（ロンバルディア同盟、ハンザ同盟）、
　　交通路による都市の交流、
・都市民衆の宗教性　→　異端的民衆運動と教会の対応
　十字軍（アルビジョア十字軍・1209-1229。アルビ派＝カタリ派）
　新しい修道院運動・托鉢修道会（ドミニコ会、フランシスコ会）
　異端審問制度
２．「十二世紀後半には」「それまで平信徒は宗教と信仰の問題を、教会に委ねておけばよいと考えていた」「けれども都市化の波をかぶった民衆は、そのような受け身の信仰生活によっては心の安らぎをうることができなくなった。」（坂口、31）
３．長期にわたるダイナミズムと安定度の高い構造性　→　スコラ的文化総合
４．ジャック・ル＝ゴフ『中世とは何か』藤原書店。
「十二世紀までの間は、神はまず第一に父でありつづけます。それからあとは、息子の肖像が優勢になります。天は受肉し、地に降りる。価値が肉体を得る。
　商人＝銀行家や知識人を通して、私は中世についての考察の本質的な枠組みを設定できたと思っています。この二つの社会階層の出現は、中世文明を「標しづける」ものです。経済的、制度的、精神的、宗教的構造の中に残された彼らの遺産は、たいへん含みの多いものです。中世はここにおいて、理性と信仰の、知性の諸形式と信仰の諸形式の間の均衡に到達します。こうしてわれわれが西洋と呼ぶものが具体化するわけです。」（163）
「千年王国の待望はしばしば改革の欲求と結びついている」、「時代の兆候は、キリスト教世界が自らの悪徳を正し、最後の日々」「に備えるべき時が近づいていることを告げているのです。」（191）
「カラブリア」「の修道士フィオーレのヨアキムは、知的・神秘主義的系統の千年至福説の中でももっとも大胆かつもっともこみ入った神学を提唱しました。彼の作品は順に、まず拒絶され、次に奨励され、また（彼の死後）糾弾され、そしてその後部分的に再評価されます。ヨアキムがつねに教会の側に立ち、一二〇〇年に書いた遺書の中でも服従と忠誠をあらためて述べているにもかかわらずです。」（191）

（1）中世都市と托鉢修道会・大学

ジャック・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店。

１．托鉢修道会

「教会の大問題は、グレゴリウス改革が未完成であったこと、異端が急速に広まったこと、それに金銭がますます流通し、富が価値として認められ、農村社会に結びついた修道院文化がもはや答えることのできないキリスト教徒のさまざまな要求が生じていた社会に、宗教が適応できなくなっていたことであった。これに答えたのは、新しいタイプの修道会を構成する何人かの修道士あるいは信徒たちであった。」(304)

「托鉢修道会はまた、とくに都市住民に対して熱心な説教をくりかえし、かれらに新しい宗教生活を教える。彼らとともに、言葉の、説得のヨーロッパが生まれ、これが世俗化されて、演説の、討論の、論争のヨーロッパとなるのである。」(307)

「修道会聖職者と在俗聖職者の対立は、十三世紀のあいだ数度にわたりパリ大学を汚染した。教皇庁の介入は一般に托鉢修道士を守る目的で行われ、介入は争いを和らげるよりむしろ悪化させる結果に終わった。ボナヴェントゥラとトマス・アクィナスはこの争いのなかで重要な役割を果たし、自発的貧困の正当性と有益性を擁護した。托鉢修道会の登場する十三世紀はしたがって、ヨーロッパの貧困の長い歴史のなかでの重要な瞬間であった。」(310)

「説教によって言葉のヨーロッパの立役者となった托鉢修道士は、慈愛のヨーロッパの偉大な推進者でもあり、社会保障のヨーロッパの祖先となった。この制度は、「慈悲の活動」の名のもとに十三世紀に確立する。」(311)

「托鉢修道会の最後の特徴は、都会の信徒への関心の結果として生まれた、第三会の創設である。・・・家庭にとどまり自分の職業を続けながら、修道士たちの生活にできるだけ近い生活を送っていた。托鉢修道会は、創設者の意志にしたがい、三つの修道会を含んでいた。男子修道会、女子修道会」「それに都市社会において影響力を大幅に拡張していた第三会である。」「しかし、つねに支配的であったのは第一の修道会、すなわち男の兄弟たちと教皇庁であった。托鉢修道会は聖職者中心主義をのがれておらず、・・・急速に「直観による集まりから制度へと」変化していった。教会のメンバーとして信徒が進化したにもかかわらず、十三世紀は俗人のヨーロッパの形成には失敗したのだ。」(312-313)

２．ゴシックのヨーロッパ

「「大聖堂の時代」」、「つねにより高く」「長さと高さの熱狂的な追求は。アミアン大聖堂においてとくに顕著である。」

「光の霊性が、ゴシック教会の高い窓の建設を産み出す原理になった」、「ゴシック様式のステンドグラスでは色彩が花開く」(314)

「大聖堂の彫刻で飾られた正面入り口が発達することで、彫刻作品は壮大な展示空間を獲得した、その最たるものである最後の審判の表象は、恐怖によっても希望によっても、垂直方向の飛翔や輝く光と拮抗するようなヴィジョンを提示した。」(315)

「彩色ステンドグラスのヨーロッパの名を高めたのはとりわけシャルトルの大聖堂においてであり、その青の美しさはいまもなおよく知られている。」(315)

３．労働そして経済活動

「十三世紀にはまた、労働という人間の活動には欠かせない領域において、心性とふるまいの重要な変化が目に見えるものとなった。」(319)

「労働の問題は、とくに修道院の世界であらわれた。修道戒律は、聖ベネディクトゥスによるものをはじめ、修道士たちに対し労働に関する二重の義務を課してきた。文書の筆写という知的労働と、生計を立てるための農作業という経済的労働とを行うべきだとされたのである。こうした労働の義務は、修道士たちにとっては贖罪行為という意味をもっていた。・・・労働の価値は十一世紀から十三世紀にかけて急速に高まっていった。農村労働の

技術が進歩し、都市では職人労働が発達し、労働を通じて富と社会的地位の追求が可能になったことから、そのイメージに変化がもたらされたのである。」(320)
「托鉢修道士たちは働くことを拒んだため批判されたが、布教もまたひとつの労働であると主張してみずからの立場を守った。」
「労働を回避することで優越性を誇示していた社会階級――瞑想修道士や聖書者たち、あるいは戦士、騎士、貴族たちが、この有閑階級に属している――にとっては、社会や精神生活における労働の地位向上は痛手であった。」(320)
「労働に対するあいまいな態度をとる、労働の尊厳と不名誉のあいだで板ばさみとなったヨーロッパが、こうして生まれた。」(321)

（２）中世の秋・おびえる中世

４．戦争

「中世において戦争は、つねに多かれ少なかれ慢性的現象であった。」(335)
「やがてすこしずつ戦争の「国民的」形態が生み出された。その好例となるのがはてしなく続いた百年戦争（一三三七―一四五三）で、十二・十三世紀以来古くから存在したフランスとインドランドの戦闘行為はこれにより近代的につくりかえられたのである。・・・技術的進歩があり、戦争は新しい現象に生まれ変わった。」(336)
「戦争の暴力に覆われたこのヨーロッパは、それでも平和への希求を忘れてはいなかった。それは中世において、社会、教会、諸勢力が、究極の理想としてきたものなのである。」(344)
・エラスムス『平和の訴え』(1517 年)

５．ペスト

「十四世紀の半ばに、中世ヨーロッパの大惨事のひとつが起こった。ペストである。」(345)
「キリスト教世界の人口の半分から三分の二が死亡したとみてよいようである。」(346)
「ペストはまた新たな感性や宗教心をはぐくんだ。死についてそれまで人々が恐れていたのは、おもに地獄に落ちる危険であった。いまやこの恐怖を第一の段階が飲みこんでしまった。・・・死に関する新しい感性をいわば一手に引き受けることになったのは、死体であった。」(348)
「メメント・モリ」「怪奇という感情、思想を含むようなある図像主題が全ヨーロッパに広がった。」(349)、「十五世紀にはキリスト教ヨーロッパの壁を死の舞踏が埋めつくした。」(351)
「ペストや飢饉や戦争に起因する重大な暴力のほかに、いくつかの出来事、いくつかの進歩が、十四・十五世紀のヨーロッパで、衝突や暴力を生じさせた。」

６．暴力・暴動

「スケープゴートであるユダヤ人に向けられた憎悪」(352)
「政治権力が比較的脆弱」、「犯罪という新しいタイプの違法的ふるまいを出現させることになる。」(353)
「魔女迫害」「十四世紀以降、とりわけ十五世紀に、もうひとつの形の暴力が発達した。魔術の弾圧である。魔術に対する信仰、その実践はつねに教会の敵」(355)
「ミシュレは直感によって、十四世紀には魔術が女のものになったという事実に気づいた。・・・魔女がヨーロッパの舞台の前面に現れ、十七世紀までそこにとどまって、多くが火刑の犠牲になった。」「ドミニコ会の二人の審問官」「『魔女に与える鉄槌』」(356)
「農民反乱」「中世末期の暴力のなかから浮かびあがるのが、農民、都市の工員、職人といった労働者たちの反乱である。」(357)
「都市の暴動」

７．教会の分裂

「教会大分裂」(364)
「ウルバヌス六世」（ローマ）と「クレメンス七世」（アヴィニョン)、「二人ともにキリスト教世界の一部を味方につけたため、キリスト教世界は服従すべきふたつの権威によって分裂した。」
「フランスは一三九五年以降、譲位の手続きによる解決を提案した。」(367)
「公会議は和解のための統一教皇として、一四一七年十一月十一日、ついにマルティヌス五世を選出」、「一四五三年にコンスタンティノープルがトルコ人に占領されて終わりになる」、「教会大分裂は、キリスト教ヨーロッパにとっての厳しい試練となった。」(368)

（３）新たな異端と新しい信仰（Devotio Moderna）
８．「ウィクリフとロラード派」(369)
「ふさわしい人物」「資格のない司祭から授けられた恩寵は無効」、「聖書のなかに起源と保証をもたないような伝統のなかで教会が下したすべての決定の有効性が否定された。」(369)
「イメージの礼拝、巡礼、死者に対する贖宥状の交付」
「ウィクリフの思想はその弟子にあたるロラード派に影響を及ぼした」、「政治的・社会的上層に庇護者をもち、影響力を行使した」(370)
「フス派」
９．下からの敬虔
「キリスト教信仰のある平和的進化について」、「「新しい信仰」」、「この精神的潮流は、ネーデルランドのデフェンテルの毛織物商人の息子である、ヘーラル・フローテの経験から生まれた。司祭であった彼は、一三七四年に財産を放棄」(373)
「司祭、聖職者、助修士を束ねる宗教的共同体である共同生活兄弟会を組織」、「風紀の改革を説き、聖職売買、禄の二重取りと闘い、助祭の同棲や、貧困の誓いを守らないことを戒めた。」
「この思想が扱う問題は具体的、日常的であり、勧める信仰はわかりやすく、実践的である。モデルは人間キリストである。」「トマス・ア・ケンピス（一四七一年没）の作とされ」た「『キリストに倣いて』」、「イエズス会の信仰内容の一部は、「新しい信仰」からもたらされたものであった。」(374)
「世界＝経済とは、都市あるいは経済圏が主導し定期的な交易が行われた空間構成」、「十四世紀に、北ヨーロッパ、フランドル、アジア世界と、イタリアの主要な港」
「その中心は、十五世紀にはアントワープ」、「ローマ帝国による古代のブローバル化（地中海世界に限定される）につづく、近代最初の大規模なグローバル化ということになる。」(382)
10. トマス・ア・ケンピス『キリストにならいて』（岩波文庫）
Thomas a Kempis（1379/80-1471）, *De Imitatione Chrisiti*
第一巻　霊の生活に役立ついましめ。第一章から第二十五章
第二巻　内なることに関するすすめ。第一章から第十二章
第三巻　内面的な慰めについて。第一章から第五十九章
第四巻　祭壇の秘蹟について、聖体拝受についての敬虔な勧告。第一章から第十八章
第一巻：
「第一章　キリストにならって、すべてこの世の空しいものを軽んずべきこと」
（１）　私に従うものは暗の中を歩まない、と主はいわれる。このキリストのことばは、もし本当に私たちが光にてらされ、あらゆる心の盲目さを免れたいと願うならば、彼の生涯と振舞とにならえと、訓えるものである。それゆえキリストの生涯にふかく想いをいたすよう、私たちは心をつくして努むべきである。」

・新しい宗教性の射程、宗教改革・対抗宗教改革、そしてキリシタンへ

（4）経済活動の展開

ジャック・ル＝ゴフ『中世と貨幣――歴史人類学的考察』藤原書店。

序

第１章　ローマ帝国とキリスト教化の遺産

第２章　カール大帝から封建制へ

第３章　十二世紀末から十三世紀初頭にかけての貨幣の急増

第４章　貨幣の最盛期としての十三世紀

第５章　十三世紀の商業革命における交易、銀、貨幣

第６章　貨幣と揺籃期の国家

第７章　貸付、債務、高利貸し

第８章　新たな富と貧困

第９章　十三世紀から十四世紀へ、貨幣の危機

第 10 章　中世末期における税制の完成

第 11 章　中世末期の都市、国家、貨幣

第 12 章　十四、十五世紀野物価、賃金、貨幣

〈補遺〉中世の土地市場は存在したか

第 13 章　托鉢修道会と貨幣

第 14 章　ユマニスム、メセナ、金銭

第 15 章　資本主義か愛徳（カリタス）か

結論

「中世には複数の貨幣が存在した」、「こうした意味での貨幣は、マルク・ブロックが第二の封建時代と呼ぶ時代に急増し､いわゆる封建制の諸制度および実践にも浸透していった。貨幣と封建制を対置させるのは、歴史的事実に即しているとは言えない。貨幣の発達にともない、中世の社会生活全体が変化した」、「都市」「税制」(292)

「商人の社会的地位、精神的地位がある程度向上したのと並行して、中世の人々の財布も生活も、つまり地上での富みも永遠の救済も守ろうとした教会が、貨幣に対する考えおよび実践を変えたのもあきらかである。」「筆者は中世の貨幣使用は贈与経済に含まれ、貨幣は神の恩寵への人間の全面的な服従に関わっていると考えていること」、「中世におけるこの世での貨幣使用を支配する考え方」「正当価格理論に見出されるような正義の追求」「「愛徳」によって表される精神的要求」(293)

「パオロ・ブロディが誤って中世の出来事とした「大革命」が起こったのはようやく十六世紀から十八世紀にかけてのことなのである。中世には金銭は経済権力同様に、いまだキリスト教社会の価値体系から解放されてはいなかった。中世の創造力は別のところにあったのである。」(294)

「中世については 15 世紀末に至るまで、資本主義、さらには前資本主義でさえ問題には出来なかったということになる。資本主義に認められる諸要素が出現したのはようやく十六世紀になってからのことなのである。」(285)、「アメリカ大陸から貴金属が潤沢にもたらされたこと、証券取引所、すなわち「有価証券、商品、サービスが取引される組織化された公共市場」」「が出現したことである。」(285-286)

・阿部謹也『中世の賤民の宇宙』ちくま学芸文庫。

「ヨーロッパ・原点への旅――時間・空間・モノ」